

ハイスクールD×D ーマルバス家復興記ー

ぬがー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

純血悪魔に転生したオリ主が、悪魔側の常識に従いつつ割と自由に行動する話です。

目次

第7話
第6話
第5話
第4話
第3話
第2話
第1話

30 25 20 15 10 5 1

第1話

吾輩は転生者である。

名前はバルバソン・バアル。今年で6歳になる。

前世の夢を見るなどは生まれてすぐからあったように思うが、前世の記憶が戻ったのは二年前の事だ。発症したら目覚めることはないとかいう病気にかかり、一週間後に目覚めたら前世の意識が今世の意識を塗りつぶしていた。

目覚めた当初は色々と混乱し、この体の本来の持ち主を殺してしまったんだろうかと悩んだりもしたが、考えてもどうしようもないのでそのうち気にしなくなった。

で次に気になったのがこの世界と生まれの事だ。

記憶を辿って分かる範囲で判断すると、自分は『ハイスクールD×D』世界のバアル家、その三男に転生したようだ。

といってもバアル家特有の『消滅』の魔力は無し。魔力の量も一般的な上級悪魔の子供と大差なく、後継者候補からは完全に外されている。だがサイラオーグのように冷遇されているかというところもそんなこともなく、他の上級悪魔の子供と同じくらいの環境を作って放置されているというのが現状だ。母親も二人目を産むために頑張っているのかそちらと会うこともない状態である。

まあオレからすれば今世の親を親と思うことはできないので、放置されている現状はありがたい。

それに金だけは使いきれないほどくれるし、人間界———というか日本———の漫画や小説、ゲームなんかも使用人に買って来てもらえる環境なので快適に過ごさせてもらってる。かなりいい教育も受けさせてもらってるし、いずれ機会があれば恩を返したいと思ってるくらいだ。

で転生したとなると気になるのが原作の事件だが、これはもう放置一択だと思う。

まず話が進むにつれてインフレが加速し、普通の上級悪魔と同等の力しか持たないオレなんか介入できるレベルではないって言うのが

一つ。

二つ目は下手に介入することで悪化する可能性も十分にあるって言うものだ。この世界での戦いはテンションとか勢いとかもかなり重要なので、原作で上手く行く流れを知ってしまったているオレがいると良い雰囲気の水を差してしまい悪影響が出かねないと思ってる。

で最後に最も重要な理由だが、オレが関わらないといけない理由は何一つとして無いことだ。モブとして巻き添えで死なないように動けば上級悪魔としていい生活を過ごせるというのに、なんで命を懸けてまで危険なことに首を突っ込まなきゃいけないのか。この状況で原作に関わろうとするやつは間違いないバカだと思う。

そんな理由でぬくぬくと貴族の生活を満喫していたある日、唐突に父から呼び出された。

困惑しつつもバアル家当主である父の指示に従わないという選択肢はないので本宅に向かうと、肖像画などでしか見たことのなかった人物が待ち受けていた。

「はじめましてゼクラムさま。バアル家三男バルバソンです。いらしていただきますね」

「ああ、だがはじめましてではないよ。とはいえ君と会ったのは生まれてすぐだから覚えてなどいないだろうが」

初代バアル家当主、ゼクラム・バアル。

子供がある程度成長した後はさつさと家督を譲り隠居したことになるが、未だに歴代バル家当主を傀儡にして悪魔社会を裏から仕切っている大物だ。産まれてすぐに見極めも済ませた子孫の顔を見になんて理由で動く人ではない。

この人に声をかけられるようなことをしたかどうかと必死に思い返してみるが、見当もつかない。

「なんでこうなっているのか、と言う顔だね。ならもつとよく思い返してみなさい。風邪気味だと言っていた使用人に君は何をした？」
「えっと、もやのようなモノがついていたので払いました。しかしこれくらいならよくあることでは？」

仙術という生命そのものに干渉するような技術もあるし、悪魔でも多少感知能力が高ければ病を感知したり、怪我を直すのと同じ要領で魔力を流して癒したりすることはできる。誰でもできるようなことをしたに過ぎないはずだ。

「ただの風邪ならな。だが彼が患っていたのは今では治療手段の失われた病の初期段階だったんだよ。君が治す少し前に医者にかかっていた記録から判明した。それ以外にも不治の病を治した事があったね？」

「あつ……！」

そういえば俺自身、眠り続ける不治の病から突然回復したんだっただ。あれは誤診と判断され医者が責任取らされたが、あれひよつとして誤診じゃなかったのか？

「思い出したようだね。ここまで証拠が揃えばもはや疑いの余地はない。バルバソン、君は母方の祖母の血を色濃く継いでいたようだ」「母方の祖母ですか？ どの家系か聞いたことがないのですが」

「バルバソンが生まれたころには既に断絶していたから知らないのも無理はない。『病』を司る旧序列5位のマルバス大総裁家だ。」

これが今回の本題でな。今後、バルバソンにはマルバス家次期当主として家を復興させるべく動いてもらうことになる。覚悟しておけ」「承知しました」

拒否権はないので即答する。それを聞いて満足したのか、ゼクラム

さまは転移魔法で帰られた。

それにしても面倒なことになった。もうこれまでのようなのんびりした生活は出来そうにない。

せめて命のかかった戦場に放り出されないよう、今は亡き魔王さまに祈っておくでしょう。

「まあ、その、頑張りなさい。私もできる限り支援しよう」

「え、あ、はい。ありがとうございます」

父上、いたんだ。完全に忘れてた。

第2話

「死ぬ……………」

この日の訓練を終え、自室に帰還したオレは力なくベッドに倒れ込んだ。

ゼクラムさまによる次期マルバス家当主指名後、予想通りのんびりとした貴族生活は消え去っていた。

来る日も来る日も訓練漬けの日々。それがもう6年も続いている。

曰く断絶したと判断された名門マルバス家を復興させようというのだから、相応の力をつけていないとバアル家の後押しがあっても魔王や悪魔政府の高官たちを納得させられないというのが理由の一つらしい。

まあこれはいい。悪魔の肉体に引つ張られてるのか、戦闘自体は危険も含めて楽しめるし、生き物を殺すことへのストレスもほぼないからな。

問題はもう一つの方だ。

悪魔社会においてマルバス家が担っていた役割とは、ずばり医者。発症数こそ少ないがマルバス家の物にしか治療できず不治の病になった病気はかなりある。シトリー家などで医療技術は開発が続けられているが進歩は遅く、オレがマルバスを名乗ると現在治療待ちでどうにか延命している連中が押し掛けてくるのは確定しているんだそう。

なので治療の練習は行っていくつもの病気を治せるようにはなっていないが、最近成長が止まってきているのだ。

元々オレは凡庸な上級悪魔程度の資質しか持たず、『マルバス』を名乗るには役者不足だった。スパルタな特訓の成果で成長限界まで早期に到った、と考えれば違和感はない事態である。

がかつての『マルバス』を期待する教育係達はそれでは納得してくれない。さらなる成長を望み限界を超えた鍛錬を強要された結果が現状だ。何年もかけて訓練漬けの生活にも慣れてはいたが、最近訓練の質と量の増加に成長が追いつかず訓練が終われば泥のように寝る

だけの毎日である。

このまま訓練の過激化が進んでいけば訓練中の事故で死にかねない。どうにかしたいとは思うが、どうにもできないのでふて腐れていつものように眠りについた。

「……ゼクラムさまって、案外フットワーク軽いですね」

「必要だと思ったことに手間を惜しむ気はないよ。早々に党首の座を譲ったのも、当主なんかやっているとこうはいかなくなるからだしね」
訓練に行き詰っているという報告を受けたゼクラムさまが速攻で動いてくれた。

なんでも元々こうなることは想定していたようで、色々と準備は進めていたらしい。オレが危惧する程度の事は全部想定した上で行動させてみたいだ。

それで行き詰まりを解消するための手段があるとかでどこかへ転移させられたのだが、なんかとんでもない魔力を感じる方々が集まっている。どういうことだ？

「バルバソン、これから君は悪魔政府の裏について知ることになる。耳をふさぐことはできないし、漏らそうとすれば制裁が下される。覚悟しておきなさい」

「はい」

いいえ、と言つてもデッドエンドか無限ループに入るだけなので抵抗はしない。できない。もちろん即答である。

「よろしい。ならまずは確認だが『悪魔の駒』の種類を言ってみなさい」

『悪魔の駒』は授けた対象を悪魔に転生させ、眷属にする道具だ。元は戦争で軍勢が維持できなくなったので少数精鋭の兵を作るために製造された物だったはずだが、製造者である魔王さまたちが優秀な他種族を眷属にするために使用したため間違つた使用法で定着してしまつた重要アイテムである。

「はい。『悪魔の駒』はチェスの駒を模して造られたもので、『女王』『戦車』『僧侶』『騎士』『歩兵』の五種類があります」

「一般的にはそれで正解だ。しかしなぜ『王』の駒がないかわかるかね？」

「『石碑』に登録し駒を所有する上級悪魔自身が『王』であるため、と聞いています。実際は違うのでしょうか？」

「そうだ。『王』の駒は実在する。効果は単純な強化だが、性能が高すぎて公表できない代物だがね。ここにいる『王』の駒使用者たちを見ればそれはわかるだろう？」

原作知識で『王』の駒の存在は知っていたので、どうにも驚けない。それよりもここにいるの『王』の駒を使った人だけなのか。そりやとんでもない魔力を感じるわ。

「ふむ、冷静だな。ひよとして予想していたりしたのか？」

「はい。『王』だけ駒を造らないのは不自然ですし、アジユカさまが造れない——もしくは造れないままにしておくというのも想像できなかったので隠されているのではと思っていました」

「その通りだ。アジユカ殿の技術力なら危険過ぎるものまで作れてしまふ。だからこうして渡して良い者を選別して伝えているんだよ」

そういえばマルバス家の魔力しか治療できない患者がいるからオレの成長は急務だったか。それに後ろ盾はバアル家で、臣下を紹介するって名目で監視もつけ放題だし『王』の駒の事を教えても問題ないって判断されてもおかしくなかったか。

だがこのことで前世からちよつとした疑問がある。聞いても問題なさそうな雰囲気だし、ついでだから聞いてしまおう。

「ですが『王』の駒を秘匿し、一部の者だけで使っているとばれたときが危険ですよ？ 初めから存在だけは公開し、厳しい検査基準を設けて、技術は一部の者の頭の中で保管しておけば良かったのでは？」

悪魔的にこの問題で許されないのは『嘘をついた』ことだ。功績を挙げた者は昇格させ『悪魔の駒』を与えるという契約なのに、一部の者以外には『王』の駒を渡さなかった。これが問題になっているのだから、初めから言っておけばそういった反発は防げたはず。

審査基準にしたって、何代以上に渡って悪魔政府に貢献し続けてきたこと、みたいな条件を入れておけば新参者が『王』の駒を手に入れることは防げる。

なのになぜわざわざ秘匿していたか不思議だったのだ。

「まあそれも手ではある。だがもう一つ、秘匿したことによる意味があるんだよ」

「意味、ですか？」

「そうだ。我ら貴族派と呼ばれる上級悪魔たちによって『王』の駒が秘匿されたことで、アジュカ殿は我らの弱みを握り制裁を下せるようになった。これがどういうことか分かるかね？」

「えー、いつでも排除できるからと、目こぼしをしてももらえとかですか？」

「それもある。だが最大の利点は我々がアジュカ殿にとって邪魔になつたとき、政治的に排除するという手が取れるようになったことなんだよ。これがないと武力で滅ぼすしかなかったからね」

「あつ………」

そりや大事だわ。超越者であるアジュカさまに攻め込まれたらただの上級悪魔じゃ滅びるしかない。だが政治的に排除されただけなら、縁を頼って返り咲ける可能性がある。

なによりゼクラムさまにとって悪魔というのは、初代72柱の悪魔とそれに連なる純血悪魔の事を指す。邪魔になつたからとそれらが滅ぼされてしまう前に、ワンクッション入れられる現体制は有用だつ

たということか。

「理解できたようだ。ではこれより『王』の駒の授与を開始する。公式な物ではないから肩の力を抜いて指示に従いなさい」

「はい！」

第3話

『王』の駒を使用してから、オレの生活は再度一変した。

ほとんどの不治になっていた病は簡単に治せるようになり、これなら大丈夫と判断されたのか正式に次期マルバス家当主として公表された。成人したらマルバス家当主を名乗ることになっている。これに伴いバアル家から離れかつてマルバス家が所有していた屋敷で住むようになり、患者きやくがゼクラムさまの紹介で来るようになった。今ままで治療が出来ていなかったために患者が溜まっており、割と忙しい。

その合間に行われる戦闘訓練だが、こっちは逆にきつくなった。『王』の駒で強くなったとはいえ上には上がいるし調子に乗るな、という教育だろう。ゼクラムさまが連れてきたレーティングゲームのトップランカーの眷属たちに毎度のようにボコボコにされている。年季の差か、戦闘にかける意識の差か、地力で勝ろうと技術や戦術で完封されてばかりだ。

最後に最も変わったことだが、礼儀作法の勉強に力を入れるようになった。マルバス家次期当主を名乗っても誰も文句は言わないレベルの実力はつけたから、人脈を築くために学園に入学する準備だとか。他の人とは入学時期がずれてるんじゃないか、とも思ったがその程度のことは大して問題にならないらしい。

総合して考えると前よりきついのが、近い将来原作の事件が起きたときに後方支援要員として前線から離れ確実に生き延びるためだと思えば頑張れた。

そんな忙しい日々を送っていたが、厄介事はこちらの都合など無視してやってくるものだ。今回もそうだった。

「グレモリーから長女の誕生会の誘いだ？ しかもマグダラン兄さまとかは誘ってないだろうに、オレを直接つてどうよ？ バアル家に喧嘩売ってるのか？」

こういった書状を見ずに捨てるのは失礼だし、返事もしないわけにはいかないから見るが、これはひどい。マルバス家をバアル家から引き抜こうとしている、と疑われても仕方がない行動だ。最悪の場合は

バアル家家臣団が暴走しないようゼクラムさまに援護をお願いしないといけないかもしれない。

そう思っていたが、読んでみると見過ごせない箇所があった。

「差出人がグレモリー家の次男だと……!?!」

原作ではないはずの人物。しかも否応なしに原作に影響を与えるポジション。こいつに好き勝手されて原作の事件が上手く解決されないと現時点でもボロボロの悪魔陣営が本気で滅びかねない。そうなれば連鎖的にオレも没落である。それは避けたい。

色々悩んだ末、父上とかに話を通して一度会ってみることにした。

「で、勝手に招待状出したせいでお前自身が参加できないとこだったと。行動が場当たり過ぎじゃね?」

「ははは……。その辺は勘弁してくれ。こっちも切羽詰ってるんだよ」

そう言っただけ苦笑いを浮かべているのはグロース・グレモリー。母親はグレモリー家当主ジオテイクス・グレモリーの戦友の誰か——誰だか判明すれば高確率で正妻のヴェネラナ・グレモリーが殺しに行く

ので未だ不明。グロースが純血悪魔ということのみはグレモリー卿が特殊な『偽りの証言を行わない』という契約魔法で証明している――で、要は妾腹の子らしい。

そのくせサーゼクスさまやリアス・グレモリーを上回るほど綺麗な紅色の髪と魔力を持ち、一部の家臣からはグロースにこそグレモリー家を担って欲しい、という意見も出ているのでグレモリー夫人からかなり嫌われているんだとか。

そして予想通りこいつもオレと同じ原作知識持ちの転生者。ただ原作とは関係のないところで窮地に陥ってるらしく、藁にも縋る思いでオレに招待状を出したんだそうだ。

その思いはどうか叶い、原作にいなかった人物の情報に釣られてきたオレと一対一で話をする場を設けることが出来たというのが現状らしい。

「で、要件はなんだ？ 言っとくがオレがバアル家の操り人形だからたいして行動は出来ねーぞ」

「それでも助かる。バアル家にコネなんかまともにやったら作れるわけないからな。こっちの意向を伝えてくれる人がいるだけで大分違うし」

そう前置きして、グロースは直ぐに本題に入った。

「リアスをバアル家に嫁がせて、俺がグレモリー家を継ぎたい。バアル家にとっても『消滅』の魔力は回収したいはずだし、協力してくれないか？」

「……お家乗っ取りが目的か？ 権力目当ての政争に巻き込まれるとか御免なんだが」

「いや、目的はそっちじゃねえ。最低限、俺がバアル家に嫁入りしなくて済むんならそれでいいんだ！ 頼む、協力してくれッ!!」

「……は？」

いまこいつ、なんて言った？ 嫁入り？ いやこいつは女顔だが男のはず。じゃあなんで嫁入り？ 聞き間違えたか？

「あー、混乱させちゃったみたいだけど、聞き間違いじゃねえよ。嫁入りであってる」

「……なにがどうしたらそんな話になるんだ？」

「えーと、バアル家からグレモリー家に『消滅』の魔力返せ、って抗議が来てるのは知ってるよな？」

「ああ、バアル家からすれば絶対に譲れないことだからな。自家で失われたいよう受け継いできた力。その成果を横取りした連中が自分の上にいるなんて我慢できるわけない」

他の家だと自家の魔力を守り受け継いで、他家の力が発現した場合は婿入り、嫁入りなどで支え合ってる状況だからな。特にバアル家は魔力を受け継ぎにくくて何人も側室を貰ってるような家系だし、抗議くらいは当然のことだ。

それなのにグレモリー家は感情優先で好き勝手してるし、サーゼクスさまが家族大好きじゃなかったら村八分染みた状態になっていたのは間違いないだろう。本当に酷いものである。

「まあそれで俺の事を追い出したいヴェネラナさまが「グレモリー家とバアル家の相性が良いから優れた子が産まれた。グロースを女にして嫁入りさせよう」って言いだしてさ。このままだとそれが実行されそうなんだ」

「なんでそこで男を女にしよう、なんて発想が出るんだ……？」

「ほら、原作でも堕天使には性転換させる道具とかあったじゃんか。それに魔法でも一時的に性転換するのはあるし、その状態で『悪魔の駒』使って転生させれば固定できるって話でさ」

「ああ、うん、確かにできなくはない、のか？　そういえばマグダラン兄さまの『女王』が何故か使用されてなかったような気がする……」
「うわっ、勘弁してくれよ!?!　ひよっとして裏では話進んでるのか？　ヴェネラナさま、バアル家飛び出してきた立場だからそもそも交渉できないって思ってたのに……」

グロースが本気で不安そうな顔になる。

やっと希望が見えたかも、という時に絶望的な情報聞かされりやこうもなるか。正直、見てられないくらい辛そうだ。

オレには多少だが余裕はあるし、『消滅』の魔力持ちを取り返せるのもバアル家としては悪い話ではない。原作崩壊が起こる可能性は高

いが、オレ達が存在する時点で今さらだし、逆に原作の事件がほぼ起きなくなる可能性だってある。手伝いくらいはしてやろう。

「まあグレモリー家にはもう後を継ぐ男の子供がいるんだから女の方は寄越せって意味の可能性もある。ていうか大抵当主を継ぐのは男だし、そっちの可能性の方が高い。あんまり悲観すんな」

冥界は実力主義がかなり浸透してるし、戦闘能力は個人差が大きすぎて男女の差など大した問題ではない。だが今も昔も悪魔貴族の当主とは配下を率いて戦いに赴く立場であり、子供を産んで血を繋ぐという超重要な役割を担う女性はできれば避ける、という風習があるのだ。そうでなければ「バアル家最強の女性」と言われたヴェネラナ——女性で最強なのは男性を含めるとゼクラムさまがいるため——が当主になってただろうし。

「……そうだな。ぐずぐずしてたら人生バッドエンド一直線だし、チャンスがありそうなら掴みに行くしかない。リアスを嫁にするつもりでいるんなら、俺にはありがたいことだ」

どうにか持ち直せたようだ。声にも張りが戻ってきている。

じゃ、とりあえず今できることを確認しよう。お互いにできる事やらコネ、家での味方が分からないと、何をしたらいいかすらわからないからな。

第4話

「一応試してみたが……まさかマジでできるとはなあ……」

グロースとの密談の後、まずは得た情報について確認を行うことにした。

とはいえオレはマルバス家次期当主。バアル家次期当主であるマグダランの『悪魔の駒』の使い方に口出ししたり聞き出したりできるような立場ではない。現当主である父から聞き出す、というのも無理。

折を見てリアスをマグダランの嫁に勧めるとか、オレのところに来る患者とその家族に協力してもらって「リアスがバアル家に嫁入りすべき」みたいな空気を作っていくくらいが精々だろう。

なので政治的な方は後回しにして、『悪魔の駒』による性転換が可能か確認することにした。

実験対象は人間。悪魔で試して上手くいったせいで性転換が普通に行われるようになってもまずいし、堕天使や天使の捕獲は難しい。他の神話勢力の存在だと体の構造が違い過ぎるし、それを確保に行くほどの自由にできる時間はない。実験結果の社会への影響が薄く、サンプルとして悪魔に近い結果が得られそうなモノを選ぶと人間しかなかったのだ。

こういう理由で実験対象にする種族は決まったが、次の問題は個体の選別だ。

『悪魔の駒』は配下に下賜する物として最高の物、というのが悪魔の常識。それを実験に使い、結果だけ確認したら殺して駒を取り出す、というのはさすがに顰蹙を買う行為だ。数に限りがある以上、優秀で裏切る心配の薄い相手を選ぶ必要があった。

そこで活用するのが原作知識だ。どうも人間界のネットを使って調べた限り、他作品の地名とか学校名などがいくつも見つかった。なので他作品キャラの中から性転換しても気にせず、上手く操縦できそうで、それなりに強くなりそうな奴を選んで探すことにしたのだ。条件に合う奴を風漬しに探すと、オレの世間での評価がとんでもないこ

とになるからな。

そんなわけで女にして眷属にしたのがこいつだ。

「おおおおおおお〜ツ！ マジで髪がサラサラになってるツ！！大分伸びたし、これならツインテールにできるツ！！」

事前に説明していたとはいえ、女になったことに一切意識を向けず長く伸びた髪をせっせとツインテールにしている。

こいつの名前は観束みつか総二そうじ。『俺、ツインテールになります。』という作品の世界において主人公をしていたやつだ。かなり才能があったのか、転生に『騎士』の駒を二つ消費した。

原作の序盤では男の自分が髪を二つに結わえただけじゃツインテールじゃないという考えだったようだが、この世界だと髪が異常に剛毛なうえ全然伸びなかったから自分の髪をツインテールにするのは断念していたらしい。そこで悪魔化すれば魔力で髪質くらい変えられることを伝えればあっさり眷属化の契約を飲んだ。男のツインテールとかオレ的には見苦しいので、肉体を変化させることも含めてな。

まあこの辺は原作でも幼女化していたが序盤以外は大して気にしていなかったし、ゴリラのツインテールを評価するような奴なので自分の髪もツインテールにしたいと思っただけは納得できた。原作でイツセーの顧客にいたような変人がよくいるこの世界だと、ツインテール好きが『俺ツイ』世界よりも表に出てるのは想像通りだったしな。だがこの興奮具合はちよつと予想外。

「あー、ちよつといいか？」

「お、おお！ 悪い！ もうちよつとで終わるから待つてくれ！」
待つことしばし、ようやく納得のいくツインテールにできたのか落ち着いて話ができるようになった。

「悪い、待たせた。で、何の用だ？」

「何の用だ、じゃねーよ。お前がツインテールにできるってことに食いつきすぎたせいで、説明の途中で駒を授けたんだからな。そのせいでまだデメリットの説明してねーぞ」

「あ、うん。そりゃ悪かった。自分の髪をツインテールにできると思

うと、他の事全部どうでもよくなっちゃってさ」

多少は反省しているようだが、直す気もなさそうだし、直せるとも思ってなさそうだ。まあそれくらい凶太い精神を持っていないと、『俺ツイ』世界で主人公を張ることなどできないだろう。兵藤一誠のおっぱい狂いにも似たこの精神性は戦士としては高く評価できる点だ。それに、そんなこいつだからこそこれから話すデメリットを重く受け止め、オレを裏切ることのない配下に出ることが出来るだろうしな。

「まずオレの眷属になったんだから、オレに従属する義務が生じる。義務のきつきについてはまだ後で報酬と合わせて相談だ。ぼったくするような真似はするつもりはないが、お前の価値基準と悪魔の価値基準が違うことは想定しておけ」

「分かった」

「次に悪魔になったことで悪魔の種族的弱点も備えた体になってる。聖なる力を帯びた物には弱いし、十字架を触ったり、聖書の内容を聞いたりしてもダメージを負う。神社や寺にもその神仏の許可をとらないと入るのはきつい。吸血鬼程じゃないが弱点が多めの種族だから気をつけろ」

「初詣とか墓参りに行けないのはつらい、くらいだな。海外ならともかく日本ならそこまで苦労しなさそうだ」

「まあ悪魔は日本神族とは仲良くして、住みやすい国にさせてもらってるからな。その感想も間違っではない。」

で、三つ目だが敵対種族がいる。同じ神話勢力の天使と墮天使だ。昔戦争やってた奴らで、天使は悪魔と墮天使を敵視してて、墮天使は惰性で悪魔と天使に攻撃してる。どっちも悪魔の弱点の光を使って攻撃してくるし、人間を配下に加えて攻めてくる時もあるから警戒が必要だ」

「漫画とかで出てくる悪魔狩り的なのか？　悪魔には悪魔崇拜者のないのいないのか？」

「悪魔の人間との関係はビジネスライクなのが多いからそう言うのほぼいないんだよ。天使みたいに洗脳染みた教育したり、墮天使みたい

に浚って改造して尖兵にしたりしてないからな。

で、最後にお前的には重要な欠点だ」

「今さらっとおつかないこと言った気がしたんだけど……。それ以上に重要な欠点って？」

『悪魔の駒』で転生した悪魔は主の魔力を分け与えられて強化されるんだがな、主が死んだとき与えられた魔力が暴走して、元が他種族だと異形化して理性も吹っ飛ぶことがあるんだ。そうなったときお前のツインテールが無事かはオレには保証できない」

原作だと序盤に出てきたはぐれ悪魔がこれに当たる。どうもこの世界だと主と眷属の間で力の差が大きいほど、また主から眷属への悪感情が強いほどこういう事態が起きやすいようだが、具体的な発生の理由は未だ不明である。眷族の反乱を防ぐ効果、及び自分より強い相手を眷属にしようとする行為を諫める効果があるのであえて研究されてないだけかもしれないがな。

ともかくこの情報は観束には効果抜群だったようで、ツインテールを庇うように抱えて怯えた。

だがすぐにオレの言いたかったことを理解したようで、声を張って意志表明した。

「俺が死なないように守る！ だから見てないところで死ぬなよ！」

「おう、後で武器とか色々見せるから前衛は頼むわ」

うん、やっぱり大事な物がはつきりしてる相手だとWin—Winな関係を作り易くていいな。

他の眷属も他作品知識使って操縦できそうなのから探していくか。他作品主要キャラ眷属って転生者的には作ってみたくなるものだし。

なおこの後、親御さんに息子さんが娘さんになって、ついでに悪魔になったことを説明に行った際、観束の幼馴染の少女に盗み聞きされそっちも『戦車』の駒一つで眷属にすることになった。

『俺ツイ』世界で蛮族と呼ばれた幼馴染の少女の名前は津辺^{つべ} 愛香^{あいか}。この世界でも彼女の武術の腕前は飛び抜けており、真つ当な方法かつ適正価格で眷属にしようと思っただけならかなりの費用が掛かっていただろう。わざと境界張らずに説明して良かったぜ。

第5話

オレも十五歳になり、原作開始の年を迎えた。

とはいえオレの生活に変化はなく、趣味の眷属探しをしつつ、マルバス^いとしての役割をこなし、ついでに社交界で「グレモリー家は娘をバアル家に嫁入りさせるべき」みたいな空気を広めていた。

その影響でリアス・グレモリーにはバアル家を除き、一件も縁談が行かなかつたので二巻のイベントが潰れたりしたが、まあその辺は些事だ。

グロースの方はこの数年間、グレモリー家家臣団やその親類から眷属を選び、彼らを味方につけることで当主の座を狙いに行っていた。それに対抗するためか、それとも素か知らないが、リアスは外で功績を挙げるため駒王学園を中心とした土地の統治に向かい、偶然にも原作と似たような状況になっている。このままなら騒乱を引き寄せる天龍の性質からして、原作通りリアスの眷属になると踏んでいる。

なお原作開始前に兵藤一誠を殺してしまう、という案も考えたが堕天使陣営に白龍皇がいるし、他の陣営に赤龍帝をとられたら悪魔陣営としては大きな痛手なのでその手はとれなかった。かといっておっぱい狂いのせいでグロースが確保してもリアスを追い出そうとしていることで反感を買って裏切られる可能性がある。他の上級悪魔の眷属にさせようにも、騒乱を引き寄せる性質のある赤龍帝を積極的に抱え込みたいというやつはそうそういない。それらの理由で結局、原作通りリアスの眷属になるまで放置するしかなかったのだ。

このままの流れで行けば魔王の妹二人が駒王学園にいる状況はそのままなので、コカビエルの襲撃は行われるだろう。その時、杜撰な対応をしたリアスのミスを「次期グレモリー家当主として」裏で見守っていたグロースがフォローすれば都合よく持つて行けるはずだ。仮に上手く対応しても「それでこそバアル家にふさわしい」とか言っ

て誘導するつもりだけだな。

そうなれば連鎖で北欧との会談の際のロキ襲撃も別のメンバーで対応することになり、乳神の来訪もなくなりリゼヴィムも飲んだくれ

たまま、という理想的な展開に持って行ける可能性がある。

頑張れグロース、オレは後方で日々の仕事を適当にこなしながら安全な位置で応援してる。

だが実際はそう上手くはいかず、オレの方にも原作組に接点が出来てしまった。

「久しぶりですね、バルバソン」

「おう、久しぶり。何があったか知らないが、突然眷属全員連れて押し掛けてくるとかどうかと思うぞ？　いくら婚約者だからってさ」

不機嫌そうな表情で眷属せんりよくを率いて押し掛けてきた女、ソーナ・シリートの婚約が決まってしまったのだ。

こうなつた経緯だが、マルバス家再興に伴いかつてマルバス家に仕えていた家臣たちを探したところ、その多くがシリート家で医療関係の仕事に携わっていた事がきっかけだ。彼らも帰郷を強く望んでいたので引き抜こうとしたのだが、シリート家の主な産業が観光と医療だったためにシリート領の経済に大打撃を与えてしまうという問題が発生したのである。

それでどうにか引き抜きを止めたいシリート卿と色々話し合った結果、ソーナを正妻——マルバス家が断絶すると本気でヤバイことになる和学习できたので、バルバス家のように側室も取るよう指示された——に迎え、身内として医療機関の運営にシリート家も参加することになった。なお跡継ぎ問題に備えて、子供はマルバス家の『病』の魔力が発現した子のみマルバス姓を名乗り、他はシリート家の子として扱う契約である。

ただ原作のライザーのようにすぐに結婚しろと言うわけではないし、なんらかの条件で引き抜きを認めてくれるならいつでも破棄できるような婚約だ。こうして戦力率いて乗り込まれるような真似をした覚えはないのだが、一体どうしたというのだろうか？

「これを見ても分かりませんか」

そう言っって何やら紙を渡してきた。

手に取っって見てみると、うちの家臣団がシトリー家に送った書状だった。

内容を要約すると「誰でも通えるレーティングゲームの学校作るとかふざけたことを言うのはやめさせて、普通に学校通って常識を身につけさせてください」とのことだ。まあ冥界の常識的にはおかしなこととは言っってないし、ただでさえオレが最低限しか働かないのに正妻まで働けないとなると丸投げされてる家臣団の負担がかなり大きくなる。そしてオレは改善する気が皆無なので、ソーナの方に改善してほしいと言っったんだろう。

「これがどうかしたのか？ 別に変なことは書いてないが」

「……レーティングゲームの学校設立は私たちの目標です。いくら婚約者とはいえこれだけは譲れません」

「あー、撤回を求めてレーティングゲームでもふっかけるつもりか？ それなら眷属総出も納得だが、真面目過ぎだなソーナは。検討し直すっって言っって、実際は何も変えないとかでも問題なかったのに」

家臣団の負担は増えるが、オレの負担は増えないから別にどうでもいい。むしろオレの監視のためにバアル家から移籍してきた連中が仕事で忙殺されて自由な時間が増えるのは歓迎すべきことだしな。

これを伝えると完全に予想外だったのか、拍子抜けしたような顔に全員がなった。割と笑える光景だ。

「あ」

「どうかしたんですか？」

「いや、今の言わない方が良かったかもっって思っってな。よく考えたらレーティングゲームで負かして夢諦めさせた方がオレ的には得だったわ」

「はあっ!？」

ソーナが素っ頓狂な声を上げるが無視だ。

いや、本当に惜しいことをしたかもしれない。ここで勝負を受けていれば原作の事件を全て未然に防ぐこともできていたかもしれない。っていうのに、思ったことをそのまま口に出してしまった。

「ハイスクールD×D」という作品において、全ての事件のきっかけとなったのはコカビエルによる魔王の妹への襲撃事件だ。これが起きたから聖書の三勢力が和平を結んだし、それを好機とみた『禍の団』が大々的に活動を開始した。

だからコカビエルが襲撃してくる条件である「魔王が溺愛する妹×2がろくな護衛もつけずに人間界で過ごしている」という状況を変えれば全ての事件が起きずに済む可能性があるのだ。

特にソーナの場合、姉のセラフォルさまは感情的かつ好戦的に動いて悪魔と言う種族が「どうせ戦争などもう起こせない」と他種族から侮られるのを防ぐ役目を担っている。リアスの兄であるサーゼクスさまは穏健派なので、戦争を起こすことが目的ならソーナを冥界に連れ戻すだけでコカビエルが駒王学園襲撃をやめる可能性は高かった。

本当に惜しいことをした。今からでも撤回できないだろうか？

「やっぱり人間界への留学取りやめを賭けてレーティングゲームやらないか？ 公平なルールでの試合にするって約束するから」

「お断りします。受けるわけないでしょう」

「そういわずにさ。こつちが負けたらそれなりに支援するぜ？」

「……条件について、詳しく話し合いますよ」

お、案外簡単に釣れた。勝たせる気がないからこそその提案だし、もう少し躊躇うかと思っただがな。

次期当主になることが確定しているオレが支援するってことは、マルバス家がソーナの目標を認め協力してると言い換えられる。そういう状況になれば他の後援者も得られるだろうから、ソーナの食いつかずにはいられなかったか。

「おう。じゃあ書類も用意して正式に話進めるか」

「ええ、善は急げと言いますし、早めに決めてしましましょう」

第6話

「まだやるかー?」

「あたり、まえ、です……ッ!」

シトリー眷属とのレーティングゲームも終盤に入り、オレとソーナだけが向かい合っていた。

いや終盤と言うのは正しくないか。なにせ開幕の一撃でソーナ以外のシトリー眷属は全滅したし、オレの眷属はそもそも参加してないからな。

マルバス家の魔力は『病』。生き延びることが最優先なオレは、それで病原体の塊のような魑魅魍魎——触れて免疫がなければ病を発症。攻撃して弾けさせると病原体を周囲にまき散らす——を無数に作り出してけしかけ、自身の安全を確保したうえで戦う。

今回は特大の魑魅を一体生み出し、自分で殴って破裂させたのだ。フィールド全体にまき散らされた病は魔力が高ければ抵抗できる物。これでシトリー眷属はソーナ以外昏睡しリタイア。ソーナも常時魔力を消耗し続けてどうにか意識を保っている状態になった。

これを喰らったのが普通の眷属悪魔——限りある『悪魔の駒』を授けるにふさわしいか厳選された者達——なら何人か、特に魔力の扱いや魔法にブーストのかかる『女王』『僧侶』は残っていただろう。フィールド全体に拡散させたせいで威力、というか症状は軽かったはずだしな。だがソーナは自分の目標に賛同してくれる者、才能がなくとも使えるようになる技術を持つ者を優先して眷属にしたせいか、技量はあっても出力が決定的に足りておらずこうなった。

匙元士郎が原作のようにヴリトラの意識を覚醒させていたら抵抗できたかもしれないが、序盤の事件すら起きていない現時点では抵抗不可能だしな。何も考えられなくなつて眠りに落ち目覚めないうつて感じの『病』を使ったから、気合や根性をしぼって抵抗すらできないようこちらで対策していたというのもあるが。

その後、悠々とシトリー眷属の本陣まで乗り込み現在に至っている。

「なら続けるが、その前に一つ聞かせてくれよ。このゲームを見て楽しいとか、映像記録買おうとか観客や庶民が考えると思うか？」

「……思わ、ない、でしょうね」

「それが分かるなら問題なさそうだな。とりあえず今は寝ておけ」

病をのせた手で触れてソーナを昏睡させる。それと同時にアナウンスが響いた。

『ソーナ・シトリーさま、リタイア』

『バルバソン・マルバスさまの勝利です』

「んっ……」

「起きたか。どうだい、調子は？」

「……ッ!？」

病を治し目を覚ましたソーナがベッドから飛び起きた。

そのまま返事もせず周囲を見渡し、ここがレーティングゲームでリタイアした選手のための医療施設だと気づいて落胆した。

「……私たちの負けですか」

「おう、オレの完全勝利だ。一応確認するが、人間界への留学はやめても、契約の隙を突いて行動は続けるつもりだよな？」

「そのつもりです。あなただつてあんなゆるい条件を提示したんですから、そこまで止める気はないんでしょう？」

ソーナの言うとおりがチガチに縛って別の事で暴発されても困るので、そこまで厳しくする気はない。納得させずに力と契約で抑えつけても将来の不安が大きくなるだけだし、セラフオールさまが暴走する可能性もある。あくまでレーティングゲームに平民が参加するのは現実的ではないと納得して諦めてもらうのが目的だ。

「確かに強制する気はない。だけど今回のゲームで実感できただろ？ 力量に差があり過ぎると蹂躪して終わりになる。かといつて制限が多すぎてもつまらないし、そうなれば興行収入は大赤字だ。フィールド作ったり、リタイアした選手の治療したり、人件費や宣伝にも金はかかっているんだから、ゲーム自体が開催できなくなりかねない。そう考えれば参加できるのは貴族だけ、っていうのにも納得できないか？」

レーティングゲーム自体、自分の眷属の方が凄いついていう自慢合戦から始まった遊びが発端だからな。採算度外視で始めたものだから利益は少なく出費は多い。あまりに流行したものだからゲームを管理する委員会とか作って少しでも利益を回収できるようにしたが、映像記録の販売や領主権限で他の産業と連携をとらせてどうか、という状況だ。

権力を持たず派手な戦いもできない平民が参加したら、ほぼ利益は得られず会費だけですぐに破産するだろう。参加できるのが貴族だけなのは、平民を見下した差別からではなく、無理に参加して身を滅ぼしてはいけないという配慮からでもあるのだ。

「それは……」

「ついでに言うとレーティングゲームの勝敗には社交界での地位や名誉なんかがかかっている。だからこそ戦闘バカに商売や大口の契約をとってきて成り上がった奴らが食い物にされないよう、経済制裁やら村八分といった盤外戦術を駆使するのは当然のことなんだ。そんな業界にただの平民が入って無事で済むと思うか？ まず間違いなくゲームのフィールドに入ることすらできないぞ。巻き添えを恐れた

隣人たちに袋叩きされて殺されたりしてな」

「……ッ！」

「で一番大事なことだが、レーティングゲームに参加できるほど稼げたり、鍛えて実力を付けてたりすると、まず間違はなく上級悪魔にスカウトされて眷属になれるってことだ。運悪くスカウトされなくても売り込んでいけば余裕だろうな。レーティングゲームに関する勉強はそれからすればいいって言うのが今の冥界での方針だし、悪魔の寿命は永いからそれで問題は起きてない。

それでもまだ「誰でも通えるレーティングゲームの学校」を設立したいって言うのか？ 他の誰も望んでないのに？」

ソーナの目標の最大の問題は、冥界での需要のなさだ。人間界で例えるなら、プロ野球選手になってからようやく役立つような技術を乳児に教える教室を作ると言ってるようなものだから、需要なんかなくて当然とも言えるんだが。

これを告げるとさすがに応えたのか、俯いて黙ってしまった。

「まあ相談くらいは乗ってやるよ。これでもお前の婚約者だし、なんかお前自分の本当にやりたいことを勘違いしてるような気がするからな」

原作では学校設立はしたが、レーティングゲーム学校じゃなくて問題を抱えた貴族や平民の子供への教室って感じだった。けどああいうのこそ目指してたものって感じで、教える内容にレーティングゲームは無くても全く問題ないと思うんだ。

作りたいのがああいうのなら普通に支援するつもりだし、これを機によく考えてもらいたいものである。

「本当にやりたいこと、ですか……」

「すぐに答えを出す必要は全くないけどなー。ま、冥界でしばらくのんびりしたらどうだ？ 時間は有り余ってるんだし」

原作で事件が起きた日は刻々と近づいているが、事件が起きる状況を解消してしまえば時間が余っているというのは嘘ではない。

それにソーナの暴走は人間のペースで悪魔が生きようとしたせいだろうから、冥界で過ごしていれば自然と治るだろうしな。

「……そうですね。とりあえず少し休んで考えてみます。ただ実家には戻りにくいんですけどね」

「やっぱりセラフオルーさまの過保護が原因で居づらいとかか？ それならうちに来ればいい。うちならバアル家の後ろ盾があるからセラフオルーさまもそう簡単に干渉したりできないし、婚約者なんだから遠慮する必要もねーからさ」

人間界の常識に染まる前、なんで冥界から人間界に引っ越したか謎だったが予想通り居づらかったからか。

まあ好き勝手するのが仕事のセラフオルーさまに溺愛されてる妹とか、厄過ぎて誰もがソーナを避けて過ごすような環境だっただろうし、人間界に逃げたくなるのも理解できる。多少は労わってやろう。

「お言葉に甘えさせてもらいます」

「そう堅苦しくなくてもいいんだけどなー。ま、いいか。部屋を用意しておくよう家臣に言っておくから準備が済み次第くれればいいさ。」

じゃ、オレはこれから他の奴の治療もやってくるから」

「分かりました。あの子たちのこともよろしくお願いしますね」

第7話

ゲームの後、しばらくしてからだがソーナは本格的にうちの屋敷に住むことになった。

ただ眷属は全員元人間なためか、このまま駒王学園に通わせることにしていた。まあこの辺は個人の自由だし、オレも口出しする気はなかったな。

そしてスルー出来るかも思っていたコカビエル襲撃事件だが、こっちは起きてしまった。リアス一人だけでも標的としては十分だと判断されてしまったらしい。

最終的に白龍皇がコカビエルを回収するところは原作通りだったが、それ以外は大幅に変わったがな。

まず駒王学園で戦う際に余波が漏れないよう結界を張る必要があった。それをリアスがソーナに依頼して、学園に通う眷属にやってもらったことで情報が洩れ、オレも眷族を結界担当に派遣した。これでグレモリー家はマルバス家とシトリー家に借りが出来たわけだ。

次にオレが連絡したためたまたま暇だったグロースが眷属率いて参戦。聖剣使いと木場が戦ってる間、コカビエルと戦い追いつめることまで行っていた。なので評価は「グロースは頑張った。リアスとその眷属は応援やってないで戦えよ」となっている。

その次のイベントである駒王学園での三勢力の会議だが、結界担当で現場は見てないし、あくまで手伝ってただけのオレとソーナは不参加だ。グロース曰く「原作とほぼ変わり無し。木っ端の魔法使いを片付けてる間に終わってた」とのこと。まあイツセーがヴァーリに目をつけられるだけのイベントだし変化はなくて問題ない。

で、次なるイベントだがこれには関わる気がなかったんだが巻き込まれたようだ。

「あー、新鋭若手悪魔の会合？　なんでオレまで呼ばれんの？」

「自分の立場を理解してください。バルバソンさまが呼ばれないよう

なら、呼ぶに値する者なんかいませんわ」

報告に来たのはオレの『女王』を務めるレイヴェル・フェニックス。元々病を治せるマルバス家と傷を即座に治せるフェニックス家だけで医療機関は共同運営するはずだったが、シトリー家も参加したので側室で我慢してもらった相手だ。その代りと言ってはなんだが、『女王』の駒を渡して「社交的にはシトリー家が上の扱いだが、実務上はフェニックス家が上」な状況を作っている。本人やフェニックス家的にはこっちのほうが美味しいし文句なし、とは言っていたがな。

「まー、それもそうだがよ。オレ後方支援担当じゃんか。旧序列の1位と2位に魔王を輩出した家系の次期後継者とかの前線で活躍する連中だけじゃダメ？」

「ダメに決まっていますわ！ マルバス家は再興途中の家系なのでですから、こう言った場できちんと人脈を築いていきませんか」

会合に参加しなくても目ぼしいやつは向こうから挨拶に来るから別に困りはしないんだがな。とはいえレイヴェルにへそを曲げられると実害が出る。素直に参加しとくか。

「分かった。じゃあ眷属に集合かけといてくれ。半分以上人間界暮らしだからな」

「元人間だからって好きにさせ過ぎだと思えますが……わかりましたわ。当日の朝にはこちらに来るよう指示しておきます」

「おう、頼んだ」

待合室に着くと、そこは重苦しい空気に包まれていた。

その原因はグロースとリアス。双方の後ろにはそれぞれの眷属が控えており、一触即発の雰囲気醸し出している。

まあこの二組がこうなっているのは予想通りだ。すでに正式な次期当主である他と違って、この会合でよその家から次期当主と認識された方が正式な次期当主に大きく近づくことになる。相手が抜け駆けしたり、勝手な約束をグレモリー代表として行わないようにらみを利かせているつもりなんだろうな。

さすがにこの空気の中でふざけた言動をするのはまずいと察したのか、凶兇と呼ばれ癖がついているゼファードル・グラシヤラボラスも大人しくしていた。到着が最後になってしまったオレ達も他に倣って大人しく会合が始まるのを待つとしよう。

ギスギスした空気だったせいかな原作のような若手悪魔同士の事前の会談もなく、オレ達は会合を行う場所に通された。

お偉いさんたちの席はかなり高い所に設置されていて、一番上に魔王さまが座っており、それより下は地位が高い順に並んでいるようだ。

上から見下ろされている状況に圧迫感を感じている者もいるようだが、オレとしてはお客さんが何人も混ざっているのです。というのは感じない。親族の病気が治って喜んでボロボロ泣いてた姿を見た後だと、威圧感を覚えるような表情も仕事頑張ってるんだなー、くらいにしか思えないのである。

「よく集まってくれた。此度は次世代を担う貴殿らの顔を改めて確認するために、集まってもらった。これは一定周期ごとに行う、若き悪

魔を見定める会合でもある」

参加するにふさわしい家に子供がいなかったり、そもそも周期が開きすぎてたりでろくに開催されたことのない会合だけだな。今回も、旧序列1位と2位に、四大魔王を輩出した家系に同年代の悪魔がいるのは奇跡みたいなものだし、かなり開催時期を早めたとかの話も聞いたことがあるくらいだし。

その後はお偉いさんや魔王さまのありがたいお言葉が続ぎ、途中でオレら若手悪魔でレーティングゲームやる話が出たりした。

退屈を我慢しながら会合は続き、最後にサーゼクスさまから質問を投げかけられた。

「最後にそれぞれの目標を聞かせてもらえないだろうか？」

「俺は魔王になるのが目標です」

真つ先に答えたのはサイラオーグ・バアル。若手悪魔で最強と言われているやつであり、オレの異母兄に当たる相手だ。

サイラオーグの境遇は原作とは違い母親の治療はオレが行ったうえ、バアル卿に「ゼクラムさまは『消滅』の魔力を持たないサイラオーグを当主にすることはないと考えだ」と伝えることでバアル卿とマグダランの母の態度を軟化させたためマシなものになっている。その影響で鍛え方に差が生じたかもしれないが、かなり友好的な関係を築けている。なので彼が魔王になりたいというなら支援は惜しまないつもりだ。

「わー——」

次にリアスが発言しようとして、グロースが魔力で目立たないように殴って止めた。原作だともっとも影響力のある魔王の妹であり、グレモリー家の次期当主だったから発言は二番目だったが、この世界では次期当主候補の一人にすぎないので発言するのは後である。リアスの認識ではグロースは妾腹の子に過ぎず、自身が原作同様の立場にいると思っているので発言しようとしたのかもしれないが、そんなのをグロースが認めるはずがない。

次に旧序列第2位のアガレス家次期当主、シーグヴァイラ・アガレスが発言し、さらに次がオレだ。

「オレの大目標はマルバス家の再興と安定です。医者としてのマルバス家の役割はどうかこなせるようになったので、荒れたマルバス領の再開発と後継者作りが現時点での目標になっています」

「私の目標もマルバス家、シトリー家の後継者を産む事です。私自身はマルバス家に嫁ぐ身であり、現状シトリー家は後継者不在になっていますので急務ですから」

オレの発言に合わせてソーナが発言した。これに対しお偉いさんは大きく頷き同意した。

「うむ、血筋を絶やさぬことは貴族としてもつとも大事なことだ。良くわかつているようでなにより」

「セラフオルーさまの妹は夢見がちだと聞いていましたが、大分落ち着いたようで。冥界に戻ったことで元の聡明さを取り戻せたようですね」

後ろで匙が何やら悶えているが、お偉いさんたちへの受けはかなり良かった。懸念だったセラフオルーさまも「ソーナちゃんがそういうなら、それでいいか」と手出しはしてこないつもりのようにだした。

その後も順に発言していき、最後にグレモリー家の番になった。先に発言するのは男子であるグロースだ。

「俺の目標はグレモリー家を継ぎ、より発展させることです。まだ漠然とした目標ですが、俺こそグレモリーを名乗るにふさわしいと言ってくれる父や家臣団のためにこれは譲れません」

ここでグロースがぶっこんだ。リアスはサーゼクスさまやグレモリー夫人に次期当主として推されているが、決定権を持つのは現当主であるグレモリー卿だ。そのグレモリー卿から次期当主に推されていると言ったのだ。今後、社交界ではグロースが次期当主として扱われるようになるだろう。

当然、リアスは黙って聞いていられず、グロースに噛みついた。

「グロースッ！ それどういうことよッ!？」

「どういうことかと言われても、そのまんまだ。父上からは俺が次期当主に推されている。リアスが聞いてないのは、次期当主候補として父上は考えてなかったからじゃないか？ リアスは正直、グレモリー

とは言い難いくらいバアル家に近い魔力だし。それに『消滅』の魔力を持った奴にグレモリー家継いでもらいたいなら、全ての面でリアスの上位互換なミリキヤスいるしな」

グロースが煽りかえず。言ってることは何も間違っていないが、リアスとしては一番言われたくなかったことだろうに。そんなこと言ったら余計キレルぞ。

ただまあこの件に関してはサーゼクスさまは表立って意見することはないし、問題ないと言えなくもない。

個人的に話す程度ならともかく公式な場でグレモリー卿の考えに反する意見を言えば魔王による過干渉になり、本来なら起きなかつたはずの問題が噴出するだろうから我慢するはずだしな。余計なことをされる前に外堀を埋めておくのは悪い手ではないだろう。

その後、これから行われるレーティングゲームで次期当主を決めることをセラフオルーさまに提案されるが、リアスが負けた時に釣り合うだけのものを出せないことを理由にグロースが拒否。結局收拾がつかず、リアスだけ目標を語らないまま会合は終了した。